

第2章 各教科

第1節 国語

第1 本資料の活用について

1 作成の基本的な考え方

- (1) 学習指導要領及び埼玉県中学校教育課程編成要領、埼玉県中学校教育課程指導資料を踏まえ、国語科における学習評価の考え方から実際までを具体例を取り上げて作成した。
- (2) 目標に準拠した評価及び指導に生きる学習評価の着実な実施をめざし、評価規準の一層の明確化や学習評価後における指導の手立ての工夫等、実践に結び付く例を示した。
- (3) 言語活動の充実の中核を担う国語科として、確かな言語能力の育成に資する学習評価資料となるよう作成した。

2 取り上げた内容

- (1) 構成

本資料は、次の内容によって構成した。

第1 本資料の活用について	第2 国語科における学習評価	第3 指導と評価の実際
1 作成の基本的な考え方	1 国語科における学習評価の考え方	1 単元における指導と評価
2 取り上げた内容	2 観点別の評価規準の明確化	2 観点別学習状況の評価・評定の手順
3 実践に当たっての配慮	3 学習評価計画の作成	

- (2) 概要 ※「第1 本資料の活用について」は省略。

「第2 国語科における学習評価」の概要は、以下の通りである。

ア 国語科における学習評価の考え方

国語科における学習評価の5観点、「国語への関心・意欲・態度」「話す・聞く能力」「書く能力」「読む能力」「言語についての知識・理解・技能」の捉え方と指導に生かす学習評価を行う上での留意点を示した。

イ 観点別の評価規準の明確化

単元における評価の観点を設定する際の基本的な考え方を示した。また、評価規準の明確化を図るために、評価規準作成の留意点を具体的に示した。

ウ 学習評価計画の作成

国立教育政策研究所から示された「評価規準の作成のための参考資料」も参考にし、評価規準作成の手順と具体的な評価方法について留意点を示した。

「第3 指導と評価の実際」の概要は、以下のとおりである。

ア 単元における指導と評価

3領域1事項の学習を通して、指導と評価の実際を示した。

「A 話すこと・聞くこと」の指導では、第1学年の「(言語活動例ア) 日常生活の中の話題について報告や紹介をしたり、それらを聞いて質問や助言をしたりすること」を取り上げ、「学習活動に即した評価規準」を作成する上で留意すべき事項を示した。

「B 書くこと」では、第3学年の「(言語活動例ア) 関心のある事柄について批評する文章を書くこと」を取り上げ、単元(計画作成)における指導と評価の一体化を図る例を示した。

「C 読むこと」では、第2学年の「(言語活動例イ) 説明や評論などの文章を読み、内容や表現の仕方について自分の考えを述べること」を取り上げ、1単位時間の授業における学習指導の中で、指導と評価をどのように展開していくかを示した。

「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」では、第1学年の「漢字の行書の基礎的な書き方を理解して書くこと(書写)」の学習指導を取り上げた。書写の時間における自己評価の例やペーパーテストによる学習評価の例を示した。

イ 観点別学習状況の評価・評定の手順

単元の観点別学習状況の評価を基に各学期や学年末の評価・評定を行う際の手順と留意点を、補助簿の活用例を示し、整理して述べた。

3 実践に当たっての配慮

本資料の活用に当たっては、教育課程編成要領、教育課程指導資料も併せて活用するとともに、各学校の実態に即して更に創意工夫した学習評価を充実させ、いわゆるPDCAサイクルを確立して学習指導の改善を図ることが必要である。

第2 国語科における学習評価

1 国語科における学習評価の考え方

学習指導要領〔国語〕の目標は、「国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を養い言語感覚を豊かにし、国語に対する認識を深め国語を尊重する態度を育てる」である。国語科における学習評価は、この目標の実現を目指す学習指導に役立つよう行われなければならない。以下に国語科における学習評価の考え方について述べる。

(1) 国語科の評価の観点

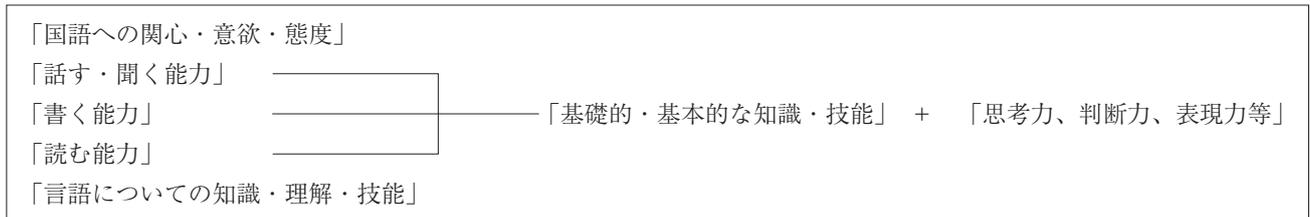
国語科の評価の観点は次の五つであり、学習指導要領の内容のまとまりに合わせた観点となっている。

評価の観点	学習評価の内容
ア 国語への関心・意欲・態度	国語科の学習内容への関心・意欲・態度を評価する。
イ 話す・聞く能力	「話すこと・聞くこと」の領域の学習状況を評価する。
ウ 書く能力	「書くこと」の領域の学習状況を評価する。
エ 読む能力	「読むこと」の領域の学習状況を評価する。
オ 言語についての知識・理解・技能	〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕の学習状況を評価する。

(2) 国語科の評価の観点の特徴

国語科の評価の観点の特徴は、学習指導要領の内容のまとまりである3領域1事項に対応して評価の観点が設定されていることである。

国語科の評価の観点構造をまとめると次のようになる。



国語科では、どの単元も一律に上記の五つの観点すべてを設定する必要はない。「話す・聞く能力」「書く能力」「読む能力」については、それぞれが「基礎的・基本的な知識・技能」と「思考力・判断力・表現力等」とを合わせて評価する観点として位置付けられている。国語科においては、「基礎的・基本的な知識・技能」と「思考力・判断力・表現力等」を明確に分けて評価することは困難であるため、領域ごとに評価する。

(3) 観点別学習状況の評価

各観点における生徒の学習の実現状況の評価し、「十分満足できると判断されるもの」をA、「おおむね満足できると判断されるもの」をB、「努力を要すると判断されるもの」をCとすることは従来と同じである。

(4) 目標に準拠した評価（いわゆる絶対評価）による評定

評定については、学習指導要領に示す目標に照らしてその実現状況の評価する（いわゆる絶対評価）という点で従来と変わりはない。学習評価から評定に至る手順としては、単元・教材の評価規準による学習評価の蓄積を基に、観点別学習状況の評価を行い、それを総括して評定とする。観点別学習状況の評価をどのように評定に総括するかについては「第3 指導と評価の実践 2 観点別学習状況の評価・評定の手順」で示した例を参考にし、各学校で研究、工夫し、共通理解を図ることが大切である。

(5) 指導と評価の一体化

学習評価は、学習の結果に対して行うだけではなく、学習の過程においても工夫する必要がある。学習前の状況の把握、学習の過程及び学習後の学習評価の結果によって、指導計画や指導方法等を改善し、学習の一層の充実を図ることが、指導と評価の一体化である。指導と評価を一体のものと捉え、学習評価の結果によって後の指導を改善し、更に新しい指導の成果を再度評価するという、指導に生かす学習評価を充実させることが重要である。

(6) 学習評価の客観性・信頼性の向上

国語科における学習内容やその実現状況は、視覚的に捉えることが難しいものが多い。学校においては、校内研修等により研究を深め、評価方法、場面、時期などを工夫し、学習評価の客観性や信頼性を高めていくことが大切である。

2 観点別の評価規準の明確化

観点別学習状況の評価及びそれを総括した評定は、目標に準拠した評価（いわゆる絶対評価）であることから、各学校においては、一人一人の達成度を客観的に評価するための具体的な評価規準を観点別に設定する必要がある。

(1) 単元の評価の観点設定の基本的な考え方

ア 「国語への関心・意欲・態度」については、「国語への」と示しているように、国語科が対象とする学習内容に関心をもち、自ら学習に取り組もうとする意欲や態度を評価する。他の観点に係る資質や能力の定着に密接に関係することから、いずれの単元にも設定して評価を行うことが基本となる。

イ 「話す・聞く能力」「書く能力」「読む能力」については、当該単元で重点的に取り上げて、指導する領域に対応した観点を設定する。通常は、この中から一つの領域・観点到に絞って指導し、評価することになるが、複数の領域を相互に関連付けて指導する方が効果的な場合には、複数の観点を設定して評価することもある。

ウ 「言語についての知識・理解・技能」については、〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕が各領域の指導を通して指導することから、基本的にいずれの単元にも位置付けて評価する。なお、〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕の(1)に示す事項について、特にそれだけを取り上げて指導する場合には、「国語への関心・意欲・態度」と「言語についての知識・理解・技能」の2観点のみを設定する単元も考えられる。

(2) 評価規準作成の留意点

ア 学習指導要領の目標や内容に基づき、年間指導計画の見通しのもと、当該単元において身に付けさせたい力は何かを明確にして評価規準を設定する。

イ 国立教育政策研究所作成の「評価規準の作成のための参考資料」を参考にする。そこに示された評価規準の設定例は、取り上げた言語活動例を通して指導できる指導事項を網羅的に例示したものであり、各学校において評価規準を設定する際は、生徒の実態や年間指導計画等の見通しのもとに重点化、焦点化して取り上げることが大切である。併せて「学習指導要領解説国語編」の内容と関係させたり比較したりしながら作成するとよい。

ウ 学習評価は、学習や指導の改善に生かすことが本質的なねらいである。身に付けさせたい力を明確にして授業改善を図るPDCAサイクルの一環として学習評価を位置付ける。効果的かつ効率的な学習評価を行うことによって、学習評価を日常化し、日常的に授業改善を図っていく。

エ 国語科の学習内容は、螺旋的、反復的な学習によって身に付くものである。当該単元の指導事項を以前にも取り上げている場合や後の単元で再度取り上げる場合もある。同系列の学習の評価規準を関連付ける等、評価規準の系統性を重視する。

オ 評価規準の示し方については、Bの規準のみ示す場合もあれば、Aの規準をカッコ書きやアンダーラインで示す場合もある。評価のねらいや場面に応じて工夫する。

カ 学習評価を行う場面や方法を明確にするとともに、評価結果に応じて全体や個別に指導、助言できるように具体的な指導の手立てを準備しておく。

キ 学習評価は、目標（ねらい）に即して設定した評価規準に則って行う。その他の観点や内容については、必要に応じて指導は行うが、あくまでも学習評価の対象は、評価規準で取り上げた内容についてである。

（例）「B 書くこと」のAについて評価規準を設定している場合

資料文の内容を読み取り目的に応じて適切に要約できているかについて、「読む能力」の観点から評価しない。

話合いの方向を捉えて的確に話しているかについて、「話す・聞く能力」の観点から評価しない。

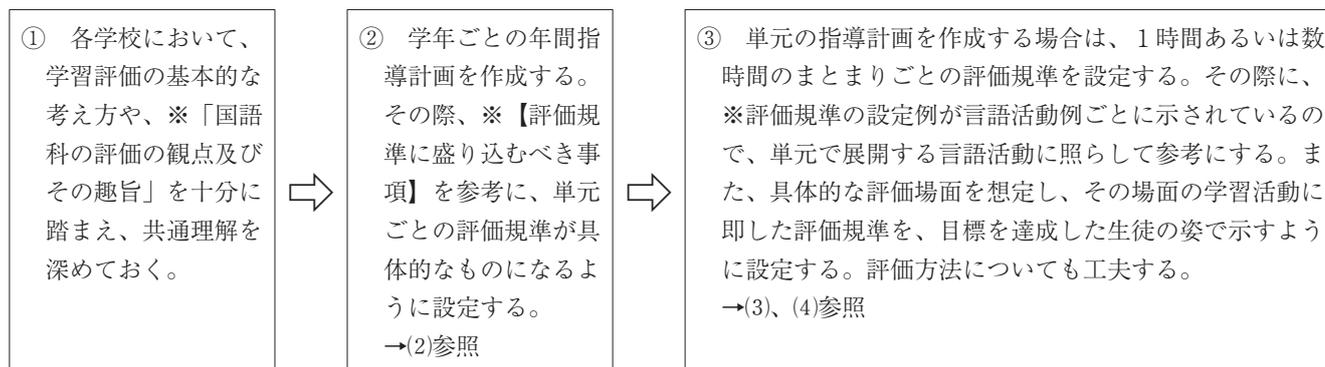
ク 評価規準や評価方法は、「生徒の学習状況を適切に評価できたか」という視点から適宜見直す。また、評価の的確性や公正性を確保し生徒の学習の改善に生かされるよう、学習評価に関する情報を生徒や保護者に適切に提供する。

3 学習評価計画の作成

(1) 学習評価計画作成の手順

学習評価計画の作成に当たっては、次のような段階を踏んで取り組むことになる。

※は、国立教育政策研究所「評価規準の作成のための参考資料」に記載されている内容である。



(2) 年間指導計画における評価規準の作成（例：第1学年 1学期）

年間指導計画の中に「評価規準」の欄を設ける。〔関〕：「関心・意欲・態度」、〔話〕：「話す能力」、〔聞〕：「聞く能力」、〔書〕：「書く能力」、〔読〕：「読む能力」、〔言〕：「言語についての知識・理解・技能」の記号で示す。）

（A = 話すこと・聞くこと、B = 書くこと、C = 読むこと、伝 = 伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項）

月	単元	教材	目標／学習活動／学習内容	評価規準	時数
4	新しい門出 A 2 C 4 伝1	・言葉の学びにあたって ・自己紹介 ・詩を読もう 「春に」他3編	<略>	<p>〔関〕 言葉のもつ役割に目を向け、言葉を意欲的に学ぼうとしている。</p> <p>〔話〕 相手や場に応じて話す速度、音量、言葉の調子や間の取り方、語句の選択を意識して話している。</p> <p>〔聞〕 詳しく知りたいところについて、質問しながら聞いている。</p> <p>〔読〕 語句の意味を理解し、想像力を働かせて詩を読み、朗読するとき注意する語句を選んでいく。</p> <p>〔言〕 詩の中で使われている表現技法の効果を理解し、詩の朗読に役立てている。</p>	1 2 4
	楷書の基本 (書写) 伝3	・「成長」 (硬筆・毛筆)	<略>	<p>〔関〕 身の回りの文字の書き方の工夫を見つけようとしている。</p> <p>〔言〕 字形を整え、文字の大きさ、配列などについて理解し、楷書で書いている。</p>	3
5	物語に親しもう B 2 C 6 伝2	・小説 「オッベルと象」 「おいのり」	<略>	<p>〔関〕 様々な本や文章を読み、自分のものの見方や考え方を広くしようとしている。</p> <p>〔読〕 様々な描写表現や場面展開に注意して読み、内容を理解し、登場人物像を読み取っている。</p> <p>〔読〕 二つの作品のおもしろさや共通点・相違点を理解し、自分の考えをまとめている。</p> <p>〔書〕 それぞれの作品の魅力を具体的に挙げ、読み手に分かりやすい文章を書いている。</p>	5 5
	文法 伝2	・言葉のきまり 文節	<略>	<p>〔関〕 日常の言語生活を振り返り、身近な文や文章について、文節に分けて考えようとしている。</p> <p>〔言〕 文の成分について理解し、文節に分けている。</p>	2

※参考「埼玉県中学校教育課程編成要領」（平成21年3月）の12・13ページ

(3) 具体的な評価方法とその留意点

これまで評価規準とその設定例を単元の学習に即して示してきた。ここでは評価規準に即して評価する際の方法や資料を一覧として示すので、評価方法を検討する際に活用されたい。

※表中の◎は、その評価方法に有用であるものを示す。

No	評価方法・資料		関心・意欲・態度	能力				言語について	
				話す	聞く	書く	読む	知識・理解	技能
1	ペーパーテスト		○	○	○	○	◎	◎	○
2	質問紙		◎	○	○	○	○	○	○
3	ノート(メモ・カード等)		◎	○	○	○	◎	○	○
4	作品(作文)	自由	○	○		◎	○	○	◎
		課題	○	○		◎	○	○	◎
5	観察		◎	○	○	○	○		○
6	面接		◎	○	○	○	○		○
7	発表・討論・スピーチ		○	◎	◎		○		○
8	聞き取りテスト		○		◎				
9	ポートフォリオ		◎	○	○	○	○	○	○
10	作品(書写)		○					○	◎

※ No.1、4、10の方法は、単元終了時の総括的評価を行うのに適している。

※ No.2、6の方法は、単元のはじめの診断的評価や総括的評価を行う際の参考になる。

※ No.3、5の方法は、単元の途中において、取組についての意欲や態度をみるのに適している。

※ No.9の方法は、累積していくものであるため、学習の過程や単元の評価に活用できるとともに、生徒自身が学習を振り返ったり新たな課題を発見したりする際にも活用できる。

※ 上表の評価方法は、学習活動に即して組み合わせて活用すると効果的である。

(4) 単元の指導計画における評価規準の作成

「埼玉県中学校教育課程指導資料」(平成22年3月)の2・3ページに学習指導案の作成を例に挙げて、詳細が示されている。主な留意点は、以下のとおりである。

- ①評価規準については、Bの状況を示す。
- ②目標に取り上げた観点以外の観点については、評価対象としない。
- ③目標の文末は、関心・意欲・態度については「～しようとしている」、その他は「～できる。」と記述する。
- ④「単元の評価規準と学習活動に即した評価規準」と「指導と評価の計画」については、記号を活用して関連をもたせる。
- ⑤「学習活動」と「学習内容」が混同しないようにする。「学習内容」は、体言止めの記述とする。
- ⑥「本時の学習指導」の「展開」の中の「指導と評価の創意工夫」の欄に「評価場面」を明示して、評価方法及び個別指導等の具体的な手立てを明確にする。なお、評価場面は、1単位時間において1～2が適当である。

【第2学年 学習指導案例】

- 1 単元名・教材名 「古典を楽しむ」 平家物語
- 2 生徒の実態と本単元の意図 <省略>
 - (1) 本単元に至るまでの指導の系統
 - (2) 生徒の実態と本単元の意図(「生徒観」「教材観」「指導観」)
- 3 単元の目標
 - (1) 進んで音読し、作品に対する自分の考えをもとうとしている。(関心・意欲・態度)
 - (2) 文章に表れているものの見方や考え方について、自分の考え方もつことができる。(読むこと)
 - (3) 作品の特徴を生かして朗読し、古典の世界を楽しむことができる。(伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項)

目標は、5観点すべて掲げる必要はない。
関心・意欲・態度は「～しようとしている」、その他は「～できる」と記述する。

4 単元の評価規準と学習活動に即した評価規準

※ () の部分はAの状況、他はBの状況を示す。

	ア 国語への関心・意欲・態度	エ 読む能力	オ 言語についての知識・理解・技能
単元評価の規準	すべての観点について網羅的に掲げるのではなく、本単元において主として付けたい力に絞り込む。学習活動があるもの全てを掲げるわけではない。	描写の効果や登場人物の言動の意味などを考え、内容の理解に役立てている。 単元の評価規準は、単元全体を通して、その領域・事項について総合的に目標を実現した姿を示す。	作品の特徴を生かして朗読するなどして、古典の世界を楽しんでいる。 古典に表れたものの見方や考え方に触れ、登場人物や作者の思いなどを想像している。
学習活動 評に 価即 規し 準た	①古典特有のリズムを楽しみ、(場面に合わせて)音読しようとしている。 ②本文や資料を手掛かりにして、登場人物の思いについて、自分の考えを深めようとしている。 従来の「学習活動における具体的評価規準」	①登場人物の会話部分を整理し、登場人物の心情の変化を読み取っている。 ②登場人物の言葉や行動が、話の展開や登場人物のもの見方や考え方に、どのようにかかわっているか(順序を追って)考えている。 ③登場人物の立場ともの見方や考え方の関係について、(作品の特徴を踏まえて)自分の考えをもっている。 すべてにおいてAの状態を具体的に示す必要はない。	①会話部分と地の文とを読み分けて音読している。 ②現代語訳や語注を手掛かりにして、内容を想像しながら音読している。 ③本文の表現(及び資料の活用)により登場人物の思いを想像している。 学習活動に即した評価規準は、その授業の目標を、学習活動を通して具現化する生徒の姿を考え具体的に記述する。

5 指導と評価の計画 (全5時間)

※評価の記号は「4 単元の評価規準と学習活動に即した評価規準」と対応

	主な学習活動	学習内容	評価規準・評価方法
2	○現代語訳を活用して音読する。 ○会話部分を整理し、直実の心情の変化を読み取る。(ワークシート)	評価方法は、全5時間の中で計画的に扱う。常に1単位時間の中にすべての観点をを入れるわけではない。	エの① オの② ・机間指導による観察 ・ワークシートの内容の考察

6 本時の学習指導 (本時2 / 5時)

(1) 目標

- 直実と敦盛の会話と描写部分から、直実の心情の変化を読み取ることができる。(読むこと)
- 現代語訳や語注を手掛かりにして、内容を想像しながら音読できる。(伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項)

(2) 展開

学習活動	学習内容	指導と評価の創意工夫
3 ワークシートに取り組む。 4 ワークシートをもとに根拠を明らかにして発表する。	○直実と敦盛の会話と描写部分の整理 ○直実と敦盛の心情の変化の読み取り ○直実と敦盛の心情変化の確認 <手立て>は、生徒がB評価に達するために教師が行う具体的な指導の手立てである。必要に応じて、A評価に達した生徒へ講じる手立ても記述する。	— 評価場面 — <学習活動に即した評価規準> エの① オの② <評価方法> ・ワークシートの内容の考察 <手立て> ・現代語訳と原文の関係が一目で分かるように作成したプリントを使い、現代語訳する抵抗感を和らげる。 ・時代背景や直実にまつわる事柄をまとめた資料のどの部分に着目すればよいかを示す。

(3) 板書計画 <省略>

第3 指導と評価の実際

1 単元における指導と評価

(1) 「A 話すこと・聞くこと」の指導例

言語活動例 ア「日常生活の中の話題について報告や紹介をしたり、それらを聞いて質問や助言をしたりすること」を通した指導

単元全体を貫く言語活動を設定する。

1 単元名・教材名 話し方入門 「お気に入りの一品」(第1学年)

2 生徒の実態と本単元の意図

- (1) 本単元に至るまでの指導の系統 〈省略〉
- (2) 生徒の実態と本単元の意図 〈省略〉

関心・意欲・態度は「～しようとしている。」、その他は「～できる。」と記述する。
 本事例では、単元の目標の(2)「話すこと・聞くこと」の目標(ねらい)に沿って、(1)には「関心・意欲・態度」の目標を、(3)には「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の目標を設定した。

3 単元の目標

- (1) 伝えたいことが相手に分かりやすいように、工夫して話そうとしている。 (関心・意欲・態度)
- (2) 話す速度や音量、言葉の調子や間の取り方、相手に分かりやすい語句の選択、相手や場に応じた言葉遣いに注意して話することができる。 (話すこと・聞くこと)
- (3) 考えや気持ちを適切に伝えるために、語句を選んで話することができる。 (伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項)

4 単元の評価規準と学習活動に即した評価規準

※ () の部分はAの状況、その他はBの状況を示す。

	ア 国語への関心・意欲・態度	イ 話す・聞く能力	オ 言語についての知識・理解・技能
単元の評価規準	・伝えたいことが相手に分かりやすいように、工夫して話そうとしている。	・日常生活の中から話題を決め、材料を集めている。(ア) ・話す速度や音量、言葉の調子や間のとり方、相手に分かりやすい語句の選択、相手や場に応じた言葉遣いに注意して、話している。(ウ)	・紹介したい内容を適切に伝えるために、語句を選んで話している。(イ(ア))
		・必要に応じて質問しながら聞き取っている。(エ)	・分かりやすいスピーチをするために、指示語や接続詞などを注意して使っている。(イ(エ))
学習活動に即した	①話題や言葉を選び、スピーチ原稿を書こうとしている。 ②原稿を基に話す練習を何度も繰り返してよりよいスピーチ	①次のような自分らしさが表れる話題を選び出している。 ・今まで出会った人との思い出の品 ・一番頑張っていることに関する物 ・集めている物 など	①紹介したいものの特徴や自分との関係が正確に伝わるように、(比喩や比較などを用いて)話している。 ②指示語や接続詞を誤りなく使っている。

「語句の選択」は、『学習指導要領解説』では、「話す・聞く能力」にも、「言語についての知識・理解・技能」にも挙げられている。話す相手や場に応じた選択は「話す・聞く能力」に、話す内容に応じた選択は「言語についての知識・理解・技能」に設定する。本事例の評価規準は、『国立教育政策研究所「評価規準作成のための参考資料」第2編 各教科及び特別活動における評価規準に盛り込むべき事項』p.17を参考にした。

国立教育政策研究所「評価規準作成のための参考資料」には、取り上げるすべての言語活動例ごとに「評価規準の設定例」が示されている。

予想される反応例を生徒の言語生活の実態から記述するよう心掛けるとよい。

単元で取り上げている知識・技能を明記する。

具体的評価規準には、「ふさわしい」「分かりやすい」「適切な」「明確に」等あいまいな言葉を用いず、評価(A・B・C)がつけられる具体的なものにする。

評価 規 準	③分かりやすく正確に伝えるためのポイントをまとめようとしている。	②聞き取りやすい音量、速度で（聞き手をひきつけるような工夫をして）話している。	場に応じた適切な言葉遣いは小学校5・6年の指導内容であるが、中学校ではその知識を活用して話すことが求められる。
		③公の場での話し言葉であることを意識し、略語や俗語、紛らわしい同音異義語、くだけた表現を用いていない、また一文が長すぎないなどの知識を活用して話している。	
	<p>学習評価にあたっては、目標（ねらい）として取り上げた観点についての指導を徹底する。そのため、他の観点については評価対象にしない。</p> <p>（例） 「A 話すこと・聞くこと」の学習指導であれば、「スピーチのための原稿を書いた」ことは「書く能力」の観点からは評価しない。</p>		

5 指導と評価の計画（全4時間）

時	主な学習活動	学習内容 目安の提示	評価規準・評価方法
1	<ul style="list-style-type: none"> ○分かりやすく話すために必要なことを復習する。 ○正確に話すために必要なことを考える。 ○学習の流れ、スピーチのテーマを確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○分かりやすく話す基本 <ul style="list-style-type: none"> ・一文が長すぎないこと（目安は40字程度） ・耳で聞いて分かりやすい言葉であること（同音異義語などは避ける） ○正確に話す基本 <ul style="list-style-type: none"> ・最初に内容をまとめた言葉を言うこと ・伝えたい項目の数を把握し、順序を考えて話すこと ○テーマ「お気に入りの一品」 <ul style="list-style-type: none"> ・自分らしさが表現される品物を選ぶこと 	<p>アの③</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発言の様子や態度の観察 ・ワークシートによる考察 <p>・今まで出会った人との思い出の品</p> <p>・一番頑張っていることに関係する物</p> <p>・集めている品物など生徒の言語生活の実態から予想される反応・求める反応も記述しておくといよい。</p>
3	<ul style="list-style-type: none"> ○原稿を基に、グループ内で練習を行う。 ○グループ内でスピーチ内容についての質問や確認、アドバイスをし合う。 ○質問や確認されたことを参考に、原稿を書き直す。 	<ul style="list-style-type: none"> ○分かりやすい話し方 <ul style="list-style-type: none"> ・適切な語句を選択すること <p>学習内容の基本は、指導事項を具体化した内容となる。具体化するに当たっては『学習指導要領解説国語編』の指導事項について解説している文言が参考となる。学習内容を具体化し明確にすることで、評価規準も明確になる。</p>	<p>アの② イの③</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループ内で練習をしている態度の観察 ・質問、確認、アドバイスの様子の観察 ・提出させたスピーチ原稿の確認（事後）
4	<ul style="list-style-type: none"> ○スピーチの発表会を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○分かりやすい話し方 ○話す技術の確認 <ul style="list-style-type: none"> ・話す速さ、間の取り方 ○話の聞き取り方 <ul style="list-style-type: none"> ・スピーチを聞く態度 	<p>イの②④</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スピーチ発表会の様子の観察（ビデオに録画しておき、評価の補助とする）

6 学習指導の展開 (○/○時の内容) 一略一

7 収集データ例 (第3・4時)

○スピーチ原稿の考察

評価規準 イの③	公の場での話し言葉であることを意識し、略語や俗語、紛らわしい同音異義語、くだけた表現を用いていない。また、一文が長すぎないなどの知識を活用して話している。
-------------	---

<p>評価Cの例と修正例</p> <p>文が長すぎる (103文字)</p>	<p>くだけた話し言葉が使われている</p>
<p>修正例:</p> <p>B 「私のお気に入りはこのタオルです。これは、姉が私の好きな歌手のライブに行ったときに買ってきてくれたものです。模様も気に入っています。横に長いので、汗をふいたり部活動のトレーニングに使ったりするのも便利です。」</p>	<p>修正例:</p> <p>C 「私のお気に入りはこのタオルで、これは姉が私の好きな歌手のライブに行った時に買ってきてくれたもので、模様も気に入っているし、横に長いので、汗とかをふくときや、部活動のトレーニングとかに使うときに便利です。」</p>
<p>修正例:</p> <p>B 「今まではいつも手袋の片方をなくしてしまい、困ってしまいました。でも、これは両方をつないでおくフックがついているので、…」</p>	<p>修正例:</p> <p>C 「今までは、いつも手袋の片方をなくしちゃって困ってたんですが、これは両方をつないでおくフックがついているので…」</p>

評価規準 オの①	紹介したいものの特徴や自分との関係が正確に伝わるように(比喩や比較などを用いて)話している。
-------------	--

評価規準 イの②	聞き取りやすい音量、速度で(聞き手をひきつけるような工夫をして)話している。
-------------	--

評価Bの例と修正例

比喩を使う

<p>修正例:</p> <p>A 「このぬいぐるみを抱いていると毛布を抱いているみたいで、心がいやされます。」</p>	<p>修正例:</p> <p>B 「このぬいぐるみは、すごくやわらかいです。」</p>
---	---

評価Bの例と修正例

相手の反応を確かめながら話す (第4時)

<p>修正例:</p> <p>A 「普通の縄跳びより持つところが長いのですが、どんないいことがあるか分かりますか？」</p>	<p>修正例:</p> <p>B 「この縄跳びは、普通の縄跳びよりも持つところが長いので、縄が速く回ります。」</p>
--	---

○グループ内で質問、アドバイスをしている様子の観察

評価規準 イの④	スピーチを聞いて質問し(相手が言いたいことを確かめたり、足りない情報を聞き出したり)している。
-------------	---

C : 何も発言できていない。
 B : スピーチを聞き、内容を確認したり質問したりしている。
 A : (Bの評価に加えて) スピーチの内容を整理し、改善案を出している。

(2) 「B 書くこと」の指導例

言語活動例 ア「関心のある事柄について批評する文章を書くこと」を通した指導

言語活動を通して、指導事項を指導する。

1 単元名・教材名 説得力のある文章を書こう（第3学年）

2 生徒の実態と本単元の意図

(1) 本単元に至るまでの指導の系統

9年間を系統的に指導する。

育成すべき国語の能力 【指導事項（書くこと）】	学習内容	単元・教材名 〈実施時期〉	学習活動と関連する他領域等の指導
・調べた内容を整理し構成を考え、相手を意識した文章を書くことができる。【1年イウ】	・集めた材料の分類・整理の方法 ・相手を意識した書き方	単元「相手や目的を意識して書こう」 〈1年・6月〉	【話すこと・聞くこと】 ○単元「説得力のある話し方」 ・説得力のある話し方の工夫 【読むこと】 ○単元「論理的に思考する力」 ・論理の展開の仕方の把握 ・構成や展開、表現の仕方についての評価
・自分の立場を明確にし、事実や事柄、意見が相手に効果的に伝わるように、文章を書くことができる。【2年イウ】	・自分の立場や伝えたい事実や事柄 ・効果的な描写の工夫の方法・推敲の仕方	単元「意見文を書こう」 〈2年・12月〉	

関心・意欲・態度は「～しようとしている。」、その他は「～できる。」と記述する。本事例では、単元の目標の(2)の「書くこと」の目標（ねらい）に沿って、(1)には、「関心・意欲・態度」の目標、(3)には、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の目標を設定した。

(2) 生徒の実態と本単元の意図
〈省略〉

3 単元の目標

(1) 社会生活の中の事柄について、自分の立場や意見を明確にして主張する文章を書こうとしている。

(関心・意欲・態度)

(2) 資料を適切に引用するなどして根拠を明らかにし、説得力のある意見文を書くことができる。

(書くこと)

(3) 文章の論理的な構成について理解し、適切な語句を用いることができる。

(伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項)

4 単元の評価規準と学習活動に即した評価規準

※（ ）の部分はAの状況、他はBの状況を示す。

	ア 国語への関心・意欲・態度	ウ 書く能力	オ 言語についての知識・理解・技能
単元の評価規準	・社会生活の中の事柄について、自分の立場や意見を明確にして主張する文章を書こうとしている。	・事柄を分かりやすく説明したり、判断の理由や根拠となる資料を引用したりして説得力のある意見文を書いている。(イ)	・文章表現の中で、和語・漢語・外来語の言葉のニュアンスを知り、適切な語句を選択している。
学習活動に即した評価規準	①説得力のある意見文を書くために、自分の主張や立場を決め、読み手にとって分かりやすい構成にしようとしている。 ②分かりやすく説明するために、判断や評価の理由や根拠となる資料を集めようとしている。	①自分の主張を書いている。 ②自分の主張を明確にし、(客観性や信頼性のある)資料を引用しながら、指定の行数以上書いている。 ③自分とは異なる意見について考え、問題点や解決策について、(資料をもとに)述べている。	①(自分の主張や話題、立場にあった)和語・漢語・外来語を使い分けて文章を書いている。
	<p>目標（ねらい）として取り上げた観点について指導を徹底する。 この【B書くこと】の中でも、「イ 記述に関する指導事項」について重点的に指導するため、他の観点については評価対象としない。評価規準は『国立教育政策研究所「評価規準の作成のための参考資料」第2編 各教科及び特別活動における評価規準に盛り込むべき事項 p.32 【「書くこと」の評価規準の設定例】を参考にするとよい。</p> <p>学習活動に即した評価規準を考える時には学習指導要領解説を参考にする。本事例では、「【B書くこと】イ 記述に関する指導事項」(p.70)を参考にしている。</p> <p>【書くこと】に関する[関心・意欲・態度]であることが望ましい。本事例では「説得力のある文章」にするための「関心・意欲・態度」の評価規準として、「資料収集」を設定した。</p>		

5 指導と評価の計画（全6時間）

時	主な学習活動	学習内容	評価規準・評価方法
1	<p>○学習の概要を知り、学習計画を確認する。</p> <p>○意見文の書き方について、教科書の例文を参考に理解する。</p> <p>意欲の乏しい生徒に対して、指導者が予め補助資料を用意する等の手立てを盛り込む。</p> <p>○自分が書いてみたいテーマを教科書の【テーマ例】と指導者が用意した【テーマ例】を参考に決める。</p>	<p>○学習計画の確認</p> <p>○意見文を書く目的・手順・構成の理解 ・「主張」と「根拠」「提案」の配列の仕方</p> <p>①序論（問題提起） ②本論1（主張と根拠） ③本論2（問題点や提案） ④結論（まとめ）</p> <p>○テーマの決定</p>	<p>アの① ・机間指導による観察</p> <p>「単元の評価規準」に記載した3観点の評価を、1時間内にすべて入れなくてもよい。</p> <p>アの① ・机間指導による観察</p> <p>変容を見るために同じ観点で評価している。</p>
2	<p>○テーマに対する主張をはっきりさせ、構成メモに記入し、発表する。</p> <p>生徒の思考を整理する手立てとする。</p> <p>○自分の主張を説得するための理由や根拠を構成メモに記入し、発表する。</p>	<p>○構成メモの書き方</p> <p>①自分の主張の記述・明確化 「○○は□□とすべきである。」 「○○は□□でなければならない。」</p> <p>②自分の主張を説得するための理由や根拠の記述・発表 「なぜなら、△△」</p>	<p>具体の文末表現例を挙げ、評価Bへの手立てとする。</p> <p>アの② ウの① ・机間指導による観察 ・構成メモへの記述・発表</p>
3	<p>○自分の主張の理由や根拠になりそうな情報を集める。</p> <p>○集めた資料の中から、説得力のある理由や根拠を選ぶ。</p>	<p>○資料の収集</p> <p>○理由や根拠の選択</p> <p>○構成メモへの記入</p>	<p>押さえない表現を予め明確にしておく。</p> <p>2時間で四つの学習活動を行うが、評価場面は1回でもよい。</p>
4	<p>○構成メモをもとに本論①（自分の主張とその理由・根拠）の下書きをする。</p> <p>○下書きを読み合い、相互評価する。</p>	<p>○本論①の下書き ・自分の主張を明確にし、その理由や根拠を分かりやすく述べること。</p> <p>○論理的で説得力のある構成と表現の工夫</p>	<p>ウの② ・机間指導による観察 ・下書きの内容</p> <p>授業終了後提出した構成メモ・下書き等を基に、評価結果を補助簿に記録する。</p>
5	<p>○反論など、自分とは異なる意見や改善点について考え、問題点や解決策について、構成メモに記入する。</p> <p>○構成メモを基に本論②（自分と異なる意見）の下書きをする。</p>	<p>○問題点や解決策の推考</p> <p>前時末に構成メモ・下書き等を回収し、一人一人の解決策を用意しておく。 指導者は、机間指導の中で生徒に問題点を指摘し、生徒に気付く機会を与える。</p>	<p>ウの③ ・机間指導による観察 ・構成メモの記述</p> <p>生徒の思考過程を確認するために赤ペン等により訂正させる。（消しゴムを使わないのも一つの方法である。）</p>
6	<p>○「問題提起」や「まとめ」を書く。</p> <p>○清書をする。</p>	<p>○論理的で説得力のある表現の工夫</p> <p>○読み手を意識した丁寧な記述</p>	<p>オの① ・完成作品の内容の考察 ・自己評価の内容の考察</p>

6 収集データ例

具体的な評価場面	評価基準と評価の実際
<p>単元計画の2時間目</p> <p>○テーマに対する主張をはっきりさせ、主張の書けた生徒から、黒板に書いて発表する。(テーマが同じだった場合は、名前のみを記入する。)</p>	<p>ウの①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・机間指導による観察 ・構成メモへの記述 ・板書での発表 <p>B 主張を書くことができる。</p> <p>C 何も書くことができない。</p> <p>〈手立て〉・黒板に書かれたものから、自分で選んで写させる。</p> <div data-bbox="1038 309 1409 439" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>全員の主張を黒板に書き出させることで、課題への取組や内容を評価することができる。</p> </div>
<p>単元計画の3時間目</p> <p>○自分の主張を説得するための理由や根拠を構成メモに記入する。</p> <div data-bbox="137 680 504 913" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>3～5分間の短い時間でよい。「3人以上の人と交換しなさい。」「1人以上の異性を入れなさい。」などと条件を出して、交流させることも指導の一つとなる。</p> </div>	<p>アの② ウの②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・机間指導による観察 ・構成メモへの記述 ・構成メモの挙手による発表 <p>B 理由や根拠を資料から探し、書くことができる。</p> <p>C 理由や根拠を書くことができない。</p> <p>〈手立て〉・交流の場面を設け、友達の考えを聞きに行かせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・3人以上の人と意見を交換させたうえで、自分の考えを書かせる。 ・友達の発表したものを写させる。 ・教師が口頭で教える。赤鉛筆で薄く書いてなぞらせる。 <p>A 客観性・信頼性のある資料から理由や根拠を探し、書くことができる。</p> <p>〈手立て〉・理由や根拠となる引用を二つ以上書かせ、より確かなものにさせる。</p>
<p>単元計画の4時間目</p> <p>○構成メモを基に本論①(自分の主張とその理由・根拠)の下書きをする。</p> <div data-bbox="137 1167 504 1451" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>教師が、個に応じた書き出しを示したり、模範となる文章を視写させたりして、書き出すことのできない生徒を指導する。</p> </div>	<p>ウの②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・机間指導による観察 ・下書きの内容 <p>B 自分の主張を明確にし、資料を引用しながら指定の行数以上書いている。</p> <p>C 書き出すことができない。</p> <p>〈手立て〉・文章の型を示したワークシートを示し、参考にさせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・段落のはじめを赤鉛筆で薄く書いたものをなぞらせたうえで、続きを書かせる。 ・教師が書いた例文を写させる。 ・アンケート等のデータを活用させる。 <p>A 自分の主張に合っており、客観性・信頼性のある資料を引用しながら、自分の考えを指定の行数以上書いている。</p> <p>〈手立て〉・俗語などを使わず、主張にふさわしい言葉遣いにさせる。</p>
<p>○生徒の作品例</p> <p>指導後、Aとなった作品例：資料を引用しながら述べている。</p> <div data-bbox="272 1559 740 1984" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>私は裁判員制度を定着させていくべきだと考えます。</p> <p>「裁判員として裁判に参加した人」に対して新聞社が行ったアンケートの結果を見ると、九割以上の人が「よい経験と感じた」と答えています。選ばれた前は、半分以上の人が「やりたくなかった」けれど、やってみて気持ちが変わったことがわかります。</p> <p>記者会見の新聞記事にも「社会を住みやすくするために何ができるのか考えれば、制度は発展していく」とあったので、裁判員制度を定着させたいと思った方がいいと思います。</p> </div> <p style="text-align: center;">⇐</p> <p>Bの作品：客観性が乏しい。</p> <div data-bbox="948 1559 1302 1984" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>私は裁判員制度を定着させていくべきだと考えます。</p> <p>選ばれた前はやりたくなかった人も、やっ後は、よい経験と感じているからです。</p> <p>記者会見の新聞記事にも「社会を住みやすくするために何ができるのか考えれば、制度は発展していく」とあったので、裁判員制度も定着させていった方がいいと思います。</p> </div>	

(3) 「C 読むこと」の指導例

言語活動例 イ「説明や評論などの文章を読み、内容や表現の仕方について自分の考えを述べること」を通した指導例

指導事項を言語活動を通して指導する。同じ指導事項でも、言語活動によって具体的指導内容は異なる。幾つかの言語活動を通して指導していくことが、安定した力となって身に付く。

1 単元名・教材名 筆者の意見を事実から検討しよう（第2学年）

安田喜憲「モアイは語る—地球の未来—」

及川敬貴「イースター島『モアイ像』の語りかけるもの」

2 生徒の実態と本単元の意図

(1) 本単元にいたるまでの指導の系統 〈省略〉

(2) 生徒の実態と本単元の意図 〈省略〉

3 単元の目標

(1) 筆者の論の進め方や文章の内容、表現の仕方について考え、自分のものの見方や考え方を広げようとしている。

(関心・意欲・態度)

(2) 文章を読んで筆者の思考に迫り、それを踏まえて読み手としての立場から筆者の考えについて、自分の考えをもつことができる。

(読むこと)

(3) 抽象的な概念を表す語句、類義語や多義的な意味を表す語句などについて理解し、語感を磨き語彙を豊かにすることができる。

(伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項)

4 単元の評価規準と学習活動に即した評価規準 〈省略〉

5 指導と評価の計画（全6時間）

時	主な学習活動	学習内容	評価規準・評価方法
1 ・ 2	○「モアイは語る—地球の未来—」の要旨をとらえるために、筆者の述べている結論の文を発見できるように読む。	○段落の書き出しに着目した内容把握の仕方 ○問いと答えの文の探し方 ・文末に着目する読み方 ○文章構成（頭括、尾括、双括） ○結論 ← 根拠（意見か事実か）	エの① オの① ・ワークシートによる考察
<p>参考：エの①問いと答え、根拠を区別して読み、それらに納得できるか否かの判断を（自分なりの理由をもって）読んでいる。オ①文章中の段落の役割や文と文との接続関係などを考えることができる。</p>			
3 ・ 4	○「イースター島『モアイ像』の語りかけるもの」から情報を読み取り、表にまとめる。	○「イースター島『モアイ像』の語りかけるもの」の内容及び主題の把握 ○文章構成（2部構成）○結論 ← 根拠（意見か事実か）	〈省略〉
5	○二つの文章の共通点、相違点を読み取る。	○二つの文章の共通点、相違点。	アの① エの③ オの② 〈評価方法〉 ・課題への取組の様子の観察 ・発表時の発表内容の観察
<p>参考：アの①本文と他の文章を繰り返し読み、自分の考えをもとうとしている（さらに、よりよいものや別の角度からの意見はないか考えている）。エの③主張と理由の関係の適切さについて、双方を比較し、（それぞれの特徴を捉えながら）どんな読み手にふさわしいか自分の考えを述べている。オの②本文と他の文章を比較しながら読み、比喩、誇張表現、数字の効果等について理解している。</p>			
6	○内容説明の紹介文を書く。	〈省略〉	〈省略〉

6 学習指導の展開（5／6時の内容）

(1) 本時の目標 二つの文章を比較して読み、どんな読み手に相応しいか自分の考えをまとめることができる。

前時の学習内容	「イースター島『モアイ像』の語りかけるもの」から情報を読み取り、表にまとめる。
---------	---

学習活動	学習内容	指導と評価の創意工夫
1 前時の復習を行う。 【全体】	○文章構成（頭括、尾括、双括式） ○筆者の主張（結論）と具体例（根拠）の関係	・既習内容を確認する。 （掲示物の利用）
活用できる既習内容は全員に確認する。 ここでは、説明的文章を教材とした単元で学習した「事実と意見に注意して読むこと」「事柄をつなげて読むこと」の学習内容を想起させる。		
<学習課題>		
2 本時の学習の めあてをつかむ。 【全体】	「モアイは語る」と「イースター島『モアイ像』の語りかけるもの」の共通点・相違点からそれぞれの特徴を探り、それぞれの文章がどんな読み手にふさわしいか考えよう。	・次時にこれらの文章の内容を説明する。
学習の出口に表現することを位置付け、習得したことを自覚させ活用につなげる。同時に「何のための（本時の）学習であるか」学習計画を生徒に示すことで、学習意欲を喚起する。		
3 文章の比較の観点について考える。【全体】	○文章の比較の観点についての理解 ・筆者の主張・文章構成・問題提起の仕方 ・使用されている語句・例示の仕方等	[構造的な板書で考えを整理] イースター島 ↔ 地球…対比 絶海の孤島 ↔ ~青い地球
指導する際、生徒に「観点」等を示すことが、学習内容を明確にすることにつながる。 国語科の目標・学習内容をしっかり指導し、それに対して評価を行う。		
4 文章の比較・考察を行う 【個人】 → 【グループ】	〈押さえる内容（例）〉	板書の工夫が、学習内容の定着に結び付く。
本時の言語活動の意図を理解させ、どの生徒も意欲的に思考し表現できるようにする。 → 個の実態に応じて、幾つかの視点を「読み方」として助言する。 例：「文末表現に着目しよう」「『地球』という言葉に着目し、順を追って読もう」「イースター島のことと地球のことを拾い出しつなげてみよう」「数字に着目し、その意味することを考えて読んでいこう」等		
共通点	・森林が消滅した原因 → 花粉の化石を分析することによって判明した。 ・モアイが倒された過程 ~ 人口増加→森林消滅→土地の荒廃→食料危機→抗争	
相違点	<p>「モアイは語る」</p> <p>①筆者の主張～「有効な資源をできるだけ効率よく長期にわたって利用する道を考えなければならない」 [根拠] 筆者自身による分析の結果 (本文例) 「私は～分析してみた。すると～発見されたのだ」</p> <p>②[構成]～モアイの秘密→イースター島の崩壊→地球の崩壊の危機 ※ はじめ(問題提起) — 中(具体例) — 終わり(まとめ)</p> <p>③モアイの写真とイースター島の図 → 問題提起など本文とのかかわり</p> <p>④数字や誇張された表現 (例) 「百年で二倍」「飢餓地獄」等</p>	

全体で学習することの目的を明確に示し、考えと考えを関係付け、深める発問を生み出す。
 例：「筆者の予測でしかないことなのにこんなに危機感を感じるのはなぜだろう」→表現の効果へ着目させる。
 「イースター島の出来事は何のために示されていたのだろう」
 「誇張した表現を使った効果」「具体的な数字で示した効果」等

「イースター島『モアイ像』の語りかけるもの」

- ①筆者の主張～「地球もまた（イースター島と同様）広い宇宙における『絶海の孤島』であるに違いない」
 [根拠] いくつかの文献による。筆者自身は分析を行っていない。
 (本文例)「一説によると～森林破壊が始まっていたという」等
- ②[構成]～はじめから地球の崩壊とイースター島の崩壊とを絡めている
 ※「モアイが語る人類の運命」と「地球は第2のイースター島か」の2部構成
- ③「ヨーロッパや熱帯諸国における森林率の動向」のグラフを明示
- ④参考文献の充実

学習計画を立てる段階で、指導者自身が予想される生徒の反応を書き出しておく。その際、これまでの評価A～Cのそれぞれの生徒の反応を意識して書き出すとよい。

工の③に対する評価例

＜予想される生徒の反応＞

「モアイは語る」

- ①(構成に着目した生徒)「構成がしっかりしているので文章を書くときの参考になる」という人向け (B)
- ②(主張の確かさに着目した生徒)「筆者自身が調査、分析しているので説得力がある」という人向け (B)
- ③(図表などに着目した生徒)「写真や図があるので具体的にイメージすることができる」という人向け (A)
- ④(文章表現に着目した生徒)「文末表現で、筆者の意見か事実か等ということが分かる。」(B)

「イースター島『モアイ像』の語りかけるもの」

- ①(構成に着目した生徒)「二つの見出しがついているし、すぐに本題に入っているので内容をすぐに理解したい人向けだと思う。」(B)
- ②(図表などに着目した生徒)「グラフは読み取れるが四つのグラフがどう関連し、本文の内容とかかわっていくのかが分かりにくい。」(A)
- ③(主張の確かさに着目した生徒)「自らの分析ではないが、多数の文献にあたることで得た知識を使っている。」→ ②③のことから多少の専門的な知識をもっている人向け。(B)
- ④(文章表現に着目した生徒)「一文一文が短かったり、体言止めを使ったり、問いの後にすぐに答えを用意したりする等しているところからテンポの良い文章を書くことを目指している人向けだと思う。」(A)

評価場面 1

〈学習活動に即した評価規準〉
 アの① エの③ オの②

〈評価方法〉

- ・ 課題への取組の様子の観察
- ・ 回収したワークシート

〈Cの生徒に対する手立て〉

- ・ 押さえた内容と結果を確認し、それらをつなげ、文を作る等。
- ・ キーワードを書いたヒントカードを示す等

課題解決への取組の様子の観察では、まず評価Cの生徒への支援を行う。

5 考察結果を報告する。

【全体】

6 本時のまとめを行う。

【個人】

- 他者、他グループの考察結果の比較とその活用の仕方
- 日常生活への文章や話し方への発展性
 (例) 本時学んだ表現の効果「数字で示す根拠」「誇張した表現」「対比」
- 本時の学習内容の整理

この場合、アの①の評価は、主に授業中の観察による。しかし、エの③とオの②については、授業後に回収したワークシートを中心に評価する。
 ※多くの場合、教える場面と評価する場面(時間)が異なる。

・ 生徒が自分の言葉でまとめるようにする。

(4) 【伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項】の指導例

1 単元名・教材名 漢字の行書の基礎的な書き方を理解して書こう 【第1学年】 (3学期)

2 生徒の実態と本単元の意図
(省略)

書写の評価は、国語科「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の中に含める。

3 単元の目標

- (1) 漢字の行書の特徴を生かして、速く書こうとしている。(国語への関心・意欲・態度)
- (2) 漢字の行書を、字形・運筆・点画のつながりなどに注意して毛筆で書くことができる。
(伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項)

あらかじめ「学習活動に即した評価規準」に対して、観察・作品・ペーパーテスト・自己評価カード等の何れによって評価するか明確にしておくことよ。

4 単元の評価規準と学習活動に即した評価規準

	ア 国語への関心・意欲・態度	オ 言語についての知識・理解・技能
単元 評価の 規準	<ul style="list-style-type: none"> ・楷書との違いについて考え、漢字の行書の特徴を生かして速く書こうとしている。 ・漢字の行書の特徴を踏まえ、自他の作品のよいところを積極的に見付け出そうとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・漢字の行書の基礎的な書き方を理解し、それを生かして書いている。
学習活動に 即した 評価規準	<ul style="list-style-type: none"> ①どのようにすれば行書の特徴を生かした書き方ができるのか考え、主体的に課題作品づくりに取り組もうとしている。 ②友達の作品から優れた点を見付け、自分の作品の向上に生かそうとしている。 (自己評価カード) <div style="border: 1px solid black; border-radius: 10px; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>「関心・意欲・態度」については、自己評価カードを参考資料とする。</p> </div> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 10px; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>「学習指導要領解説国語編」p44～45を参照するとよい。</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> ①点や画の形が丸みを帯びる場合があることを理解して書いている。(作品) ②点や画の方向及び止めや払いの形が変わる場合があることを理解して書いている。(作品) ③点や画が連続したり省略されたりする場合があることを理解して書いている。(作品・ペーパーテスト) ④筆順が変わる場合があることを理解して書いている。(ペーパーテスト) ⑤①～④を生かし、楷書よりも速く書いている。(観察・作品)

5 指導と評価の計画

時	主な学習活動	学習内容	評価規準・評価方法
1	・楷書と行書の作品を見比べ、その違いに気付く。	<ul style="list-style-type: none"> ・楷書と行書の違い ・行書の特徴 	アの① オの⑤ ・生徒の学習の様子や態度の観察 ・作品の考察
2	・行書の特徴を生かして、「白夜」を書く。	<ul style="list-style-type: none"> ・点画の丸み ・点画の方向、止めや払いの形の変化 	<div style="border: 1px solid black; border-radius: 10px; padding: 10px;"> <p>オの①～⑤は、毎時間すべてについて評価するのではなく、時間ごとに重点項目を決めて評価するとよい。</p> </div>
3	・行書の特徴を生かして、「紅花」を書く。	<ul style="list-style-type: none"> ・点画の連続や省略 ・筆順の変化 	
4	<ul style="list-style-type: none"> ・行書の特徴を生かして、「伝統」を書く。 ・自己評価カードの記入。 	<ul style="list-style-type: none"> ・既習事項(学習のポイント)の確認 ・楷書より速く書くこと 	アの①② オの⑤ ・生徒の学習の様子や態度の観察 ・自己評価カードの考察 ・作品の考察
※学習活動後、定期テストにおいてペーパーテストを行う。			オの③④

6 収集データ例

(1) 自己評価カードによる評価について

生徒は4時間目において各自の課題を清書した後、自己評価カードを記入する。

[方法]

- a 作品を書くに当たって最も努力した点はどんなことか振り返る。
- b 今回の学習で、最も向上した点はどんなことか振り返る。
- c 作成までの思いや作品についての感想など、ポイントを短い文章でまとめる。
- d 右図のような自己評価カードを作品に添付する。
- e a～cについて評価する。

「学習のポイント」に照らして、自己評価を、記号ではなく自分の言葉で記述させることで、学習内容を整理したりより明確に意識したりすることにつながる。
また、「向上した点は何か」を振り返ることは、次の学習への意欲にもつながる。

(「自己評価カード」による評価例)

氏名 ○○ ○○ 本人氏名

学習のポイント

①点画の丸み
②点画の方向、止めや払いの形の変化
③点画の連続や省略
④筆順の変化
⑤書く速さ

・最も努力した点 (③) 上記の「学習のポイント」に照らして、自己評価させる。

・最も向上したと思う点 (①)

・わたしの感想

丸みを帯びた線が書けるようになった。しかし、点画の連続の線がうまく書けなかった。

・先生からのコメント 文章による自己評価

点画の連続は、筆力の加減を意識するとよいです。

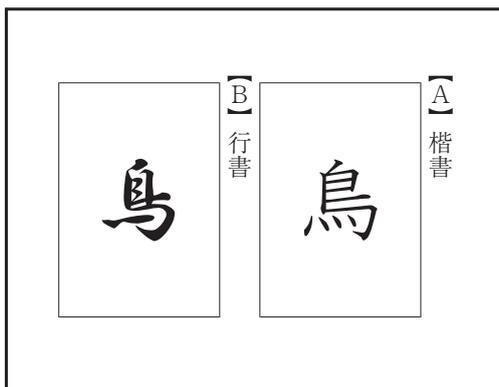
・最もよい点 (①) 教師の評価

教師の評価

(2) ペーパーテストの例

書写の評価の方法として、定期テストなどの一部としてペーパーテストを行う。以下にその例を示す。

(設問1) 次は「鳥」という漢字を楷書(【A】)と行書(【B】)で書いたものです。書体の特徴を説明したものとして最も適切なものを次のア～エの中から一つ選びなさい。(1点)



〔行書の必要性に関する問題〕

- ア 楷書は、行書に比べて点画を連続して書くので、速く書くことに適している。
- イ 楷書は、行書に比べて点画を明確に書くので、速く書くことに適している。
- ウ 行書は、楷書に比べて点画を直線的に書くので、速く書くことに適している。
- エ 行書は、楷書に比べて点画を省略して書くので、速く書くことに適している。

(設問2) 漢字を行書で書くとき、楷書と異なる筆順で書くことがあります。次の漢字の中には、楷書と異なる筆順で書いてあるものが一つあります。その番号を書きなさい。(1点)

〔行書の特徴 筆順の変化についての問題〕

- ① 伊 ② 卓 ③ 技 ④ 机

第3の2 観点別学習状況の評価・評定の手順

学期ごと、あるいは年間の評価をまとめるためには、単元や教材ごとの評価データを蓄積していく必要がある。ただし、毎時間の学習活動に即した評価規準に基づく評価が、そのまま単元の評価になるものではない。また、評定を行うためには、国語科では五つの観点別学習状況の評価（A・B・C）を一つ（数値）にまとめる作業が必要になる。以下に「観点別学習状況の評価と評定の関係」と「単元や教材ごとの評価を学期ごとの評価へ結びつける手順」について述べる。

観点別学習状況の評価と評定の関係

評定は観点別学習状況の評価を総括したものである。したがって、評定を先に決定してから観点別学習状況の評価を調整することはできない。観点別学習状況の評価において、よい「評価」がそろったものを優れていると「評定」することを評価者同士で共通理解しておく。

単元や教材ごとの評価を学期ごとの評価へ結びつける手順

指導計画に沿って用意した単元や教材ごとの「目標に準拠した評価」は、「学習活動に即した評価規準」に則て行い、その結果を補助簿に記録しておく。定期テストの結果も観点別に分類し、補助簿に記入する。そのためテスト問題は、観点ごとのねらいを達成しているかが問える問題を作成することが求められる。単に授業で行ったことを記憶しているかを問うのではなく、ねらいの達成度を測れる問題とするよう、資料文を変えて出題するなどの工夫も必要となってくる。

〈補助簿等の活用例〉

補助簿の作成は様々な方法が考えられる。ここでは、領域等の観点別シートを作成する補助簿を例に取り上げ、観点別補助簿を活用して学期ごとの評価・評定を行う手順を、第2学年2学期の「読むこと」と「言語についての知識・理解・技能」の一部について述べる。

2学期に取り上げた中で「読むこと」「言語についての知識・理解・技能」を目標として設定した教材について、単元や教材ごとの補助簿における観点ごとの「学期の評価」を、【観点別補助簿】に転記する。これらをさらに2学期の【観点別評価・評定簿】に転記する。観点別評価を総括して評定をまとめる。

【観点別補助簿】		2学期読むこと					言語に…			2学期観点別評価		
単元・教材名 ※は今学期の重点	No.	氏名	人間のさすなわけシート	事実と意見比較プリント	中間テスト	古典に親しむ※群読暗唱	期末テスト	2学期観点別評価	ディベート※	書写(毛筆作品集)	期末テスト※文法・漢字	2学期観点別評価
			1	生徒1	B	B	40	A	45	A	B	
2	生徒2	A	A	55	A	50	A	A	A	35	A	
3	生徒3	B	B	30	B	30	B	A	A	30	A	

転記する

【観点別評価・評定簿補助簿】		2学期評定						
単元・教材名 ※は今学期の重点	No.	氏名	関心・意欲・態度	話す能力	書く能力	読む能力	言語に…※	2学期評定
			1	生徒1	A	A	B	A
2	生徒2	A	A	A	A	A	5	
3	生徒3	B	B	B	B	A	3	

(1) 観点別学習状況の評価のまとめ方

単元や教材ごとの評価を学期の観点別学習状況の評価にまとめる。まとめ方については、

- ① 単元や教材ごとの評価を数値化し、単純に合計して算出する。
- ② 単元や教材ごとの評価を数値化し、授業時数や指導の重点等を考慮して算出する。
- ③ 学期の評価規準を別に定めて、改めて評価する。

などがあるが、各学校で検討し、校内（教科）で共通の方法で行うことが必要である。

(2) 評定のまとめ方

観点別学習状況の評価を評定にまとめる方法としては、以下のような方法が考えられる。

- ① 学習指導要領に示されている学年の目標のように、五つの観点を統括した学期ごとの5段階の評価規準を作成し、それに基づいて評定を出す。
- ② 観点別学習状況の評価をそれぞれ数値化し、あらかじめ作成しておいた5段階に分ける規準表に沿って算出する。観点別学習状況の評価を数値化する際には、
 - ア 単純にどの観点も同じ配点にする。
 - イ 授業時数や指導の重点等を考慮した配点にする。
 ことが考えられる。

評定のまとめ方についても、客観性・信頼性を高めていくことが必要である。そのために各学校で検討し校内で共通の方法を確認していくことが必要である。